

文字研究の基礎分野の検討

木村 規高[†]

キーワード： 文字学、文字論、文字研究の下位分野、統字論

1 はじめに

音声言語研究の側面について考えてみると、音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論といった中核となる下位分野（以下基礎分野と呼ぶ）が存在する。また手話研究においても、「手話音韻論」「手話形態論」「手話統語論」といった分野が示されており（神田 1994）、これらの枠組みを用いた分析が可能である。一方で音声言語研究に比べて立ち遅れている文字研究については、このような基礎分野が定まっていない現状があり、先行研究ではいくつかの提案はなされているものの、研究者によってその名称や定義に違いが見られる。また、文字研究の基礎分野の構築という名目での研究は、管見の限りほとんど見当たらない。そこで本稿では、文字の研究において、どのような要素・現象が研究対象となり、どのような分野・部門がたてられるのかについて、先行研究の分析から、統一的な文字研究の基礎分野の提案を試みる。

本論に入る前に、術語に関して1点述べておく。「文字」という語は、個々の文字を指す場合と集合体としての文字を指す場合がある。本稿では木村 (2023: 23-24) で示されたように、個々の文字を特に「字」と表現し、集合体としての文字と区別する。文字という術語は特に文字研究では、犬飼 (2002: 2) の述べているように、言語の何らかの発音と意味を書き表してい

[†]筑波大学大学院人文社会科学研究群博士後期課程

るもので、字が並べられたものとしたい。また、「文字学」と「文字論」についても区別する立場を取るが、これに関しては本論で述べる。

2 先行研究の概観

ここでは、3 節での文字研究の基礎分野の検討に向けて、先行研究をいくつか列記する。このような分野の提案を試みた研究はあまり多く行われていないが、森岡 (1968)、西田 (1986)、犬飼 (2002) において、その検討がなされている。森岡 (1968) は、音声言語研究の 4 つの側面である音声論、音素論、形態論、構文論¹に相当する分野として、文字研究では「文字論」「文字素論」「文字形態素論」「構文論」が設定できると述べている (森岡 1968: 15-17)。文字論は、字の種類、字形、字体、結合法などを記述する分野としてたてられている。文字素論は、千差万別の音声に対して音素を設定できるのと同じように、さまざまな字形²が見られる文字にも文字素と呼ばれる文字単位を想定し、それを対象とする分野である。文字形態素論は、いわゆる視覚情報の形態素であり、意味をもつ最小言語単位の研究である。これは森岡が主張してきた、文字は意味を識別する 1 つの要素として、言語機能の能記の役割を果たしているという考えに基づく。同音異義語は音声のみで意味を判別することは難しく、文字という視覚映像を介して意味が導かれるとしている。それは表音文字であっても表意性が内蔵されているということであり、例えば、日本語の助詞「は」「を」「へ」などは実際の音との乖離がみられるが、これは字のもつ表意性を優先させた結果であるという (森岡 1968: 14)。最後に構文論は単語による文の構成法の研究としているが、深くは掘り下げられていない。

西田 (1986) では、文字学の中心を担う分野として、字の配列方法に関する問題を対象とする「統字論」が挙げられている (西田 1986: 241)。具体的には縦書きや横書き、右書きや左書きといった書字方向がこの分野で扱

¹本稿でこれらの分野は、一般的な名称に従いそれぞれ、音声学、音韻論、形態論、統語論と呼ぶが、ここでは森岡がたてた文字研究の分野との名称の対応をわかりやすくするために、原著の名称で記した。

²森岡 (1968: 16) は、ひらがなを例にとると、活字体、変体仮名、筆写体があり、さらにはそこに加えて個性的な書き方がなされると述べている。

われるが、言語の類型における語順と同様の立場であると述べていることから、音声言語の統語論に当たるものであると考えられる。

同書では、これと並ぶ主要な研究領域として、字の内部構造の配置の問題を対象とする分野である「形字論³」が挙げられており、音声言語の形態論に相当すると述べられている (西田 1986: 243-249)。統字論では横書き型に属すチベット文字も、字の単位でみると縦に字素が並べられている、といった事例はこの形字論で扱われる。

また文字学の 1 領域と題して「字素論」が挙げられているが (西田 1986: 222)、これに関しては具体的な記述がなされていない。

加えて西田は、「対照文字学」という学問の構築を唱えている (1986: 239-240)。その記述から、文字研究の基礎分野のヒントとなるものが見えてくる。研究内容は以下の通りである。

たとえば、各種の壮族がつくった疑似漢字を比べて、字形の構成の違いを論じたり、漢字と西夏文字と納西文字を対照して、表意字形上に現れる意味分析の相違などを考える、といったことなどが、この分野の作業になる。

(西田 1986: 239)

上記の例の 1 つ目は、それぞれの地域で字の構成方法にどのような違いがあるのかを対照させた事例である。壮文字は清の時代に、広西鎮安府、慶遠府、太平府で作られたものが記録されているが、「年」を表す字を見比べると、鎮安府では左に意符で右に音符が配置され、太平府はそれが逆になっている。そして、慶遠府は音符のみが表記されているといったように違いが見られる。

2 つ目の具体例として、字の構成が、どのような意味をもつ字素から成り立っているかを対照させた事例が述べられている。漢字と西夏文字と納西文字の「銅」の字を見てみると、漢字は金偏と「同」を左右に配置した

³西田 (1986) では、「形字法」「形字法の探求」と題してその具体例が載っているが、これらを研究する分野の名称としては、同書 p. 222 で提案されていた「形字論」と推測される。

形声文字で、西夏文字は金冠と「赤い」を表す字を上下に組み合わせた会意文字、納西文字は鍋の象形の中に、火 (= 赤い) の象形を入れる会意文字である。このような対照研究していくことにより、西夏文字は金冠の会意文字が多かったり、納西文字は金属を素材とする代表的な器具を字に加える事例が多いといった特徴が見えてくるようになるというものである。

これらの事例は文字研究の基礎分野として述べられているわけではない。しかし、これらを分析する学問は文字研究の基礎分野としてたてるべきであろう。

犬飼 (2002) では、音韻論、形態論、統語論に対応する文字研究の基礎分野として「字素論」「字態論」「統字論」が挙げられている⁴。字素論は、その体系的な組織を言語的機能の観点から見るもので、字態論は文字列の形態のあり方、それらと語または形態素との対応関係に関する研究と定義されている。統字論は、西田が主に字の「配列方法」、つまり一般的には文字は線状性に基づいて書かれるため、「書字方向」についての研究をそう呼んでいるのに対して、犬飼 (2002) では統字論がより広いものを対象としている。例えば、文字列の文節、補助記号・句読点、書字方向と読みやすさなども含まれる。

さらに、統字論について西田と犬飼の見解を基に、統字法の分類を試みた研究に永井 (2005) がある。そこで定義された統字論の範囲としては、書字方向を中心としながらも、字を組み合わせる文字列にするときの規則も含むものであり、西田と犬飼の中間的な範囲と言える。

3 先行研究の分析と文字研究の基礎分野の検討

以上の先行研究を基に、本節では現状の問題点を整理し、統一的な基礎分野を提案することを目指す。第 1 に先行研究はいずれも音声研究との対応に触れている。しかしこの点でずれが見られる。大きな問題となるのは、文字研究の基本となる単位を、字としている研究者と語としている研究者に分かれるということである。形態論に相当すると述べられていた西田の

⁴しかし「字態論」に関しては、ほとんどが音声言語の語彙論に相当するとも述べられている (犬飼 2002: 147)。

形字論を見てみると、それは字の内部構造の分析である。一方森岡と犬飼の形態論に相当する分野は、名称やその範囲に違いは見られるが、共通している点としては、語を表す字そのものの分析を対象としている。詳しくは 3.2 節で述べたいと思うが、差し当たり、音声言語のいずれに相当する分野であると述べていたかを表 1 に示す。

表 1：先行研究で示された文字研究分野と音声研究分野の対応

	音声学	音韻論	形態論	統語論
森岡 (1968)	文字論	文字素論	文字形態 素論	構文論
西田 (1986)		(字素論) ⁵	形字論	統字論
犬飼 (2002)		字素論	字態論	統字論

以下では音声言語研究との対応ごとに、各文字研究分野の有用性について検討していく。

3.1 音声学に相当する文字分野

音声学に相当する文字研究の分野としては、森岡 (1968) にて、「文字論」という名称でたてられており、その研究内容を見てみると、字の種類や字形、字体、結合法などと書かれている。これに似た定義として、亀井他 (1996: 1344-1345) や福盛・池田 (2002: 34-35)、黒田 (2021: 12-13) では、主に文字の言語的機能を扱うべき分野である文字論に対して、文字そのものの形状や形式を扱う分野を文字学と呼んで区別している。この「文字学」と森岡の「文字論」の研究対象の範囲は大方一致していると言え、特に福盛・池田 (2002: 34) では、まさしく音声学に相当する分野として文字学を想定している。森岡がこれを「文字論」と呼んだのは、当時は文字学と文字論の定義の区別がはっきりしていなかったことと、音声言語の研究分野も「音声学」ではなく「音声論」と呼んでいることから、それに対応した

⁵西田 (1986) において、字素論が音声研究の音韻論に当たるものだという記述は一切ないが、形字論＝形態論、統字論＝統語論という関係性を考えると、音韻論に当たるものを想定したと推察される。

名称を付けたに過ぎないと考えられる。つまり、「文字学」と言い換えて差し支えないであろう。

3.2 音韻論に相当する文字分野

本節では音韻論に相当する文字研究の分野について検討していくが、西田 (1986) の字素論については、詳しい説明がなされていないため割愛する。しかしながら、統字論の説明の中で、「字素」とは字の基本単位のこと、漢字でいえば部首、ラテン文字でいえば字そのものがそれに当たると述べられているため (西田 1986: 241)、これらが研究対象となると推測されることは述べておく。

そして森岡の「文字素論」と西田の「字素論」、及び犬飼の「字素論」は字の内部構造の分析という点で共通しているが、文字素と字素という単位の定義に若干の違いが確認できる。

3.2.1 「文字素論」の検討

森岡の「文字素」の説明は漠然としたものであるが、文字素論は字母表を作ることによって完成すると思うと述べている (森岡 1968: 16)。字母というのは、一般的には単音文字 (アルファベット)、もしくは音節分解型文字⁶の音素単位を指す。森岡の想定した範囲がどれを指していたかは不明であるが、音声言語の音素と一致する要素を想定しているとしたら、この定義であった可能性が高い。ただその場合にはいくつか問題が生じる。1 つは音素がいずれの音声言語にも存在する要素であるのに対し、文字は体系によっては、必ずしも音素を表しているとは限らないという点である。仮名の「か」を *k* の要素と *a* の要素に分解することは不可能であるし、濁点は明確な音素を表すわけではなく、濁音であることを示す記号に過ぎない。2 つ目は文字素の上位分節を研究するであろう文字形態素論というのが、単語内部の最小の意味をもつ単位としての要素を想定しているという事実である。すると、例えば漢字の部首などの研究は文字素論と文字形態素論のいずれの範囲にも及ばないということである。一方、犬飼 (2002) の字

⁶木村他 (2022) で定められた文字のタイプの 1 つである。1 字を音素の単位に分けることが可能な音節文字で、ハングルやポラード文字などがそれに当たる。

素論における字素の範囲は、音素を書き表す要素に限定しているわけではなく、「個々の字とその構成要素について」を対象にすると述べられているため、部首も含まれると言える。西田 (1986) は、字素論に関しての詳しい説明はないものの、字素とは字の基本単位のこと、漢字でいえば部首、ラテン文字でいえば字そのものがそれに当たると述べられているため (西田 1986: 241)、ほとんど犬飼の定義と同義である。このことから、まずは文字素論をたてるとすれば、その定義をはっきりさせる必要がある。

3.2.2 犬飼 (2002) の「字素論」の検討

犬飼のたてた字素論は、個々の字とその構成要素が対象である。この範囲を音声言語の音素論に対応するものだとしていることに鑑みると、文字研究に共通する字素というレベルを想定し、それを対象とした研究という意味ではなく、語義を区別する最小単位の研究という点に基づく考えだと推測される。なぜなら犬飼は、字素論の研究の中で、部首は形態素ではないとし、部首の表す意味は漠然と意味範疇を示すだけであると述べているからである (犬飼 2002: 24-25)。これは「大」「太」「犬」などにおいて、語義を区別する *cue* が字画であるのと同じように、部首も語義を区別する *cue* でしかないということである (犬飼 2002: 25)。語義を区別する最小単位というのは、字によっても文字体系によっても異なるため、「個々の字とその構成要素」と述べたのはその違いからで、主に前者が表音文字の研究で、後者が音節分解型文字と表語文字の研究を指すと思われる。

ただ、語義を区別する最小単位の研究を字素論と呼ぶことにはいくつか問題がある。語義を区別する最小単位というのは、上述のように音声言語においても語によって異なる。つまり、音素がその役目を果たすこともあるが、形態素が担うこともある。文字研究でいえば、1 画が担うことも字素が担うことも、さらには 1 字が担うこともある。したがって、音声言語が二重分節性にしたがって研究分野を分類しているという点では、文字研究の分野もそのようなものを想定してその角度から設定するのが好ましいと考える⁷。

⁷犬飼 (2002: 27) でも、字の二重分節性を設定できるか否かの議論を行っている。

もう 1 つの問題は、「字素論」という名称についてである。おそらく「音素論」という術語への対応から「字素論」と呼んでいることが伺えるが、やはり多くの研究者が、その範囲に違いは見られるものの、「字素」を字の 1 つのレベルとして設定しているため、字素レベルの研究という印象を与えてしまう。これらは字の分節を設定し、そのレベルごとに学問分野の研究対象とすることを支持する理由となる。

最後にその研究範囲について見てみると、語義の区別に拠らない範囲も研究の対象となっており、例えば「无」から「ん」が生まれたという事例を扱っている。これはそもそも文字の言語機能に関する研究ではなく、文字学で扱われるべき範囲である。つまり、歴史言語学に相当する歴史文字学といった分野の研究ではないかと考えられる。

3.2.3 字の二重分節性の検討

これらの検討を踏まえると、字の分節を設定する必要がある。では音素論に相当する分野は何かと考えると、字は音節分解型文字ではない限り、音声言語の構造構成を再現しているわけではないから (Coulmas 2003: 53)、音素の存在を想定するのは有意ではない。そして逆に文字研究から、例えば字素が音声研究の何に当たるとかというのも、現時点では文字の類型によると考えられる。黒田 (2021: 23-24) でも、言語の音を表す単位は、漢字とハングルを見ただけでも異なり、複数のレベルが存在すると述べられている。つまり、音声言語と文字言語で完全に一致する要素を想定するのはかなり難しいと言える。そのため、各分節は音声言語のいずれに対応するというものではなく、文字研究に特有の要素として存在するものだとすべきである。

これを踏まえて、字の分節に関して述べた 3 つの研究を取り上げる。張静賢 (1997) と福盛・池田 (2002)、及び福盛・池田を参考に術語を再定義した黒田 (2021) である。張静賢 (1997) は主に漢字について適用される概念であるが、「筆画」「部件 (字素)」「整字」の 3 つのレベルに分けることが可能だと述べている (張静賢 1997: 43)。筆画は字を構成する最小単位であると述べられているが、部件と整字の具体的な定義は不明である。ただ具体例から推測すると、整字は 1 字に相当すると考えられる。部件は、「漢

字を形づくる最も基本的な構成要素」と述べられており、部首に近いが、筆画を組み合わせて 1 つのまとまりとして認識できるレベルのことを指しているようである。また部件は、どこまで細かく分けるかによって複数の段階の部件が存在し、犬飼 (2002: 27) の指摘によると、意味との直接の対応を要件としているという特徴もある。

福盛・池田 (2002) では、形状としてひとまとまりを成すものを「字節」、その字節を構成する要素を「字素」と呼んでいる。字素は漢字の部首や仮名における濁点などがこれに該当すると述べられている (福盛・池田 2002: 45)。

福盛・池田を参考に術語を再定義した黒田 (2021) は、字節を「文字」と呼び、文字列内でほかの文字と置き換え可能な、つまり範列関係にあるものだという説明が補足されている (黒田 2021: 22)。そして字素に関しては、「書記素」と呼ばれ、「意味あるいは音声 (またはその両方) の弁別に寄与する字素 (のまとまり)」として定義されている (黒田 2021: 22)。ここでいう字素とは、張静賢 (1997) の筆画に当たる概念であることに注意が必要である。さらに書記素を、単独で文字を構成できる「自由書記素」と、単独では文字を構成できない「拘束書記素」に分け、文字を 1 つ以上の自由書記素 (+拘束書記素)、もしくは 2 つ以上の拘束書記素からなる記号として再定義している (黒田 2021: 23)。

以上 3 者の術語とその定義を表 2 にまとめる。

表 2：字の二重分節性に相当する概念について述べた先行研究

	字	第 1 次分節	第 2 次分節
張静賢 (1997)	整字	部件 (字素)	筆画
福盛・池田 (2002)	字節	字素	
黒田 (2021)	文字	書記素	字素

3 者の見解を見比べると、字の二重分節性に相当する概念の範疇は大方一致しているため、まずはその名称について統一を図りたい。本稿では字面のわかりやすさと、他の術語との被らないといった点から、福盛・池田

の「字素」「字節⁸⁾」に従い、定められていなかった第 2 次の分節に関しては、張静賢の定義した「筆画⁹⁾」を採用したいと思う。

次にその定義を比較すると、第 1 次の分節に当たる部分に違いが見られる。張静賢の定義した「部件」に関しては、それぞれの要素がもつ機能の面ではなく、主に平面図形で視覚的にひとまとまりとして分けられる単位を基準としている一方で、黒田の「書記素」は、「意味あるいは音声 (またはその両方) の弁別に寄与する字素 (のまとまり)」と定義されている¹⁰⁾。ただ、筆画 (黒田のいう字素) 自体も弁別的価値があるはずであるから、かたまりとして認識され、それ自体で意味をもつ単位ということが、字の第 1 次の分節を特徴づけるものだと言える。例えば張静賢は、“旦”の字の最後の横棒について、筆画でありながらも部件だとしている (張静賢 1997: 44)。

整理すると、筆画の定義は、「意味あるいは音声 (またはその両方) の弁別に寄与する、字節・字素を構成する最小単位」いうことができる。一方字素は、文字によっては最小の意味をもつ単位であるし、最小の音の単位でもあるため、繰り返すが、完全に形態素に相当する要素ではない。また、「培」の字を例にとると、字形が変化した結果、現代では「立」と「口」は意味的な機能も音声的な機能ももたないと考えられ、ただ視覚的にひとまとまりとなる平面的な図形とみなされる場合もある¹¹⁾。しかし、これらは単独で用いられると語を表せる。以上のことから、字素の要件としては、1) 意味あるいは音声 (またはその両方) の弁別に寄与する、2) それ自体で

⁸⁾ 字節は 1 字に相当する単位である。この 2 つの術語の違いとしては、字は広く一般的に用いられるが、文字研究における字レベルでの研究を考えた際に用いられる単位として、筆画と字素の上位レベルとしての字節という術語を採用したい。

⁹⁾ 字を構成する要素である 1 画 1 画の名称については、漢字においては張静賢の提案のように「筆画」と称されることが多いが、「字画」という呼び方もある。また犬飼 (2002: 23) では、字を構成する 1 つ 1 つの要素を字画と呼ぶが、それらによって構成された全体も字画と呼ぶため、特に点画と呼んで区別する場合があると述べられている。しかし点画というのは、非常に短い 1 画のことを連想させるため、本稿では用いないこととする。「筆画」と「字画」についてはその違いが明確ではなく、研究者によって恣意的に選択されていると思われる。これはいわば文字研究の術語の問題であり、今後の検討を要するが、本稿ではその名称については深く踏み入らないこととし、「字画」という名称も可とする。

¹⁰⁾ 福盛・池田 (2002) の字素については、どちらの立場を取っているか不明である。

¹¹⁾ その場合でも字素に分解することで、学習時に構成を覚えたり、情報処理に役立つと考えられる。

意味あるいは音声 (またはその両方) を表す、3) 平面図形で視覚的にかたまりとみなされる、の 3 つである。注意点として、2) は「培」の例のように、その字素を含む字節の意味や音声に直接関係するとは限らないということである。本稿では、これらを張静賢の示した「字の基本的構成要素」の特徴とする。

これらは字の研究において、音声言語のいずれに相当するのかといった点からではなく、音声の研究とは一線を画すものとして捉えたい。よって、ここに字を構成する最小単位としての筆画を研究する「筆画論 (字画論)」と、字の基本的構成要素である字素を研究する「字素論」を提案したい。

3.3 形態論に相当する文字研究の分野

形態論に相当する文字研究の分野は、既に述べたように、研究者によって字の内部構造の分析か、語を表す字そのものの分析かという大きな違いが見られる。この事実を念頭に置いたうえで検討していきたい。

3.3.1 「文字形態素論」の検討

文字形態素は、表意性をもつ最小の言語形式と定義されており、森岡 (1968) の論の中心となる内容である。これは文字には意味を識別する 1 つの要素としての働きがあるという考えに基づき文字形態素を設定しているのだが、犬飼 (2002) は否定的な意見を述べている。詳しい内容は犬飼 (2002: 113-121) にゆずるが、言語学者の主張としては、意味とは外界に対する人の認識の仕方であるから、語形が成り立つと同時に語の意味も成り立つ。つまり、語の意味と語形は一体のものとして脳内に貯蔵されており、語形＝音韻なしに視覚上の媒体から意味を得られることはないという主張が一般的だという¹²。筆者もこの立場を支持する。文字が意味を明確にする役割を担っていることは事実かもしれないが、それは概念を区別するなどの補助的な手段に過ぎない。森岡は漢字を全廃すると、現在の語彙体系が崩れると述べているが (森岡 1968: 12)、かつての漢字から、現代ではほとんど表音型文字であるハングルのみの使用に切り替わった朝鮮において、

¹²特に宮島 (1981) において、「文字形態素論」への反論が述べられている。

それ以後、言語体系が崩壊したとみなすことはできないであろう¹³。文字の変化が多少の語彙の変化を導くことはあっても、宮島 (1981: 25) が述べているように、それはあくまでも「変化」であって「崩壊」とは呼べない。つまり、文字はあくまでも 2 次的な要素ということである。また森岡は、日本人が常に音声を文字に還元して意味に達する修練を積んでいるため、同音異義語を区別できると述べているが (森岡 1968: 12)、同音異義語を区別できるのは、語形というのが、概念的な意味を介して言語外の事物や事象と結びついているからである。このことから、視覚情報の形態素なるものが存在しなければ、この研究は音声言語の形態論そのものになってしまうため、本稿では、これを音声言語の形態素に当たるものとして定義することはしない。

しかし、この問題を完全に無視することはできない。文字というのが人の認知にどうかかわってくるのかという点については重要な研究であり、これについては 3.3.3 節で詳しく述べる。

3.3.2 「形字論」の検討

形字論は、端的に言えば字素の配置の問題だと考えられる。例として挙げていたチベット文字は、音節分解型文字であるため、音素が字の基本単位の字素となることが推測され、それらは字素ごとに配置される位置が決まっている。この配置を類型化したり、その上で字内部の書字方向を研究するのがこの分野の作業であると考えられる。このような研究は結局字素の単位を研究対象としていると言えるため、字素論と重なる部分があると言える。

また、西田は形字論が音声言語の形態論に相当する分野であると述べているが、形態素が意味をもつ最小の単位であることを考えると、チベット文字の音素表記 (=字素) には意味が含まれていない。一方漢字の部首に意味が含まれているという立場を取れば、形字論は音声言語の音素レベル

¹³特に北朝鮮では、1948 年以来、漢字の使用は廃止されたと言われているが (河野他 2001: 769)、その言語体系の崩壊が起きたとは言えない。

にも形態素レベルにもわたる分野ということになる¹⁴。音素の配置というのはどの言語であっても線状性という特質があるため、その配置は基本的に直線状で問題にならない。しかし、文字研究では字素の配置が文字体系によって各々異なりを見せるため、形字論が存在するのである。形字論とは音声言語のいずれに相当するのでもなく、文字研究に特有のものだというのがその位置づけであろう。

この字内部の配置 (書字方向) というのは、形字法としてみなすことができる一方で、西田の形字論の説明の中には以下のような事例がある。それは「みすみす」という表記からわかるように、仮名は語のどの位置に置かれようと、同じ字素が用いられるというものであり、「環境自由形」の形字法をもつという例である (西田 1986: 246)。しかし、これは字素の配置の問題ではなく、その出現形態や表記規則の問題である。また西田は、例えば縦書きの統字法をもっている、「語」のような字自体は左右に書かれるという事実から、字形の最小単位をどこにおいて統字法を見るか考える必要があるとし、その上で字素と統字法の間に形字法を考えざるを得ないと述べている (西田 1986: 244)。この 2 点を考えると、字素の位置による出現形態の差異という観点は、現時点では犬飼の定義する字態論で扱われるべきだと考える。そして配置という点を考えると、1 字素が 1 つの字として機能する文字体系の場合、書字方向の問題と変わらないため、形字論の問題というのは、基本的に音節分解型文字か表語文字に限られる。

しかし、音節分解型文字ではなくても字の内部の配置というのが研究対象になり得る場合がある。一見ひらがなやアルファベットは、最小単位の筆画の概念を除けば、それ以上の単位に分解できない。しかし追加される字素は存在し、仮名の濁点や、フランス語のアルファベのアクサンテギュやセディエユなどがそれに当たる。これらの書字方向は統字法とは異なるものとして研究対象になり得る。

¹⁴そもそも形字論は文字学の範疇だと考えられる。これは、森岡が音声学に対応する文字論の研究内容として挙げていた結合法と似た領域だと推測できる。音声言語の形態論のようにその役割や機能について研究範囲が及ばないため、形態論に相当する分野というのはこの点でも否定される。

ここで福盛・池田 (2002) が提案した字節というレベルを当てはめれば、ひらがなの各字は字素でありながら、形状としてひとまとまりをもつ 1 つの字節であることがわかる (福盛・池田 2002: 45)。つまり、形字論は字節内部の字素の配置の問題とすることができる。1 字素が 1 字節である字に関しては、そこに配置の問題が存在しないから研究対象とはならない。仮名は基本的には音節分解型文字ではないから形字法は存在しないが、濁点を含む字節では、2 つの字素で構成されることになり研究対象となる。

ただし、形字論は形態論との対応という点で考えると、一致している箇所は少ない。また注釈 14 で述べたように、配置の問題を扱うものであり、字の形状・形式の問題と言えるため、本稿では形字法を文字学の下位分野での研究とし、文字研究の基礎分野としてはたてないこととする。

3.3.3 「字態論」の検討

次に「字態論」について検討していく。字態論とは、主に文字列の形態のあり方、それらと語または形態素との対応関係に関する研究と述べられているため、研究対象は文字列であることが伺える。これは犬飼が、部首は形態素ではないと述べているように、あくまでも意味をもつ単位を形態素に相当するものだと見ているため、字という単位を基本として、その内部構造の分析を試みるのではなく、語という単位を基本とし、その内部を研究対象にする分野である。「形態素」に相当する部門を想定するとき、字の形態素と文字の形態素が存在するのは前述の通りであるが、おそらく前者が筆者の提案する「字素論」に含まれ¹⁵、後者は現時点では犬飼の提案した「字態論」に当たると考えられる。筆者は音声言語の形態素が文字言語のいずれに当たるのかということは問題としていないため、字素論も字態論もいずれも形態素に共通する側面をもち、重要な研究対象となると考える。

しかし、この字態論は扱われる範囲が広く、かつ語 (=文字) の構造の研究から外れるものも含まれるため、字態論=形態論というわけにはいかない。犬飼自身も、間接的には犬飼のたてた字素論や統字論、その他の文

¹⁵前節で述べたように、完全に音声言語の形態素に相当するものというわけではなく、字素は文字言語に特有の要素である。

字研究に広く関係する分野であり、大部分が語彙論に相当すると述べている (犬飼 2002: 147)。その具体的な研究内容の 1 つに、「団扇」「うちわ」「ウチワ」のように、どの文字体系で書くかによってどのような印象の違いが生まれるかというものがある (犬飼 2002: 76)。これは確かに文字列の形態のあり方に関する研究と言えるが、特に文字体系の違いによる意味の付与・区別が研究の対象となっていることがわかる。

一方で別の例として、「世界中」の仮名表記は「せかいじゅう」と「せかいちゅう」のどちらが正しいかという問題がある (犬飼 2002: 52)。これは表記上の意味というよりも、文字列の形態と語または形態素、ひいては音素との対応関係に関する問題であり、少なくとも「団扇」の例と大きく異なる研究分野であると言える。またこの事例における字態論とは、音素レベルも含めた字の現れ方、つまり形態全体の問題であり、必ずしも語や形態素レベルに対応するわけではないことがわかる。さらに言えば正書法とも深く関わる問題であると考えられる。例えば、形態と音素の距離の度合い、つまり、スペリングからどれほど容易に発音を予測できるかという程度の深さを *orthographic depth* と呼ぶ (Lieberman, Liberman, Mattingly & Shankweiler 1979: 75-76)。これに関して、音声言語の特徴との関連性についての研究や、形態 (スペリング) と音韻対応の一貫性の測定研究なども行われており、このような研究は当該分野の範疇だと言える。

したがってこれら 2 つの事例から、研究範囲が広いことが問題となっていた字態論を細分化し、前者のような、表記による意味の際に関する研究分野を「文字意味論」、後者のような、特に文字の形態に関する議論を扱う分野を「字態論」と呼ぶことを提案したい。

これらはまた、西田 (1986) のたてた形字論とは一線を画す分野であることはいうまでもないが、形字論と並んで文字研究の重要な側面だと考えられる。

3.4 統語論に相当する文字研究の分野

統語論に相当する分野としては、森岡が「構文論」をたてていたが、詳しい説明はなされていなかったため、ここでは議論としない。一方で「統字論」という分野が、西田 (1986) と犬飼 (2002) によってたてられていた。

両者がこの分野を提案しただけでなく、それを基に、永井 (2005) では統字法の分類案についての研究が行われているため、最も隆盛した文字研究の分野であると言える。ただし、統字論で扱う範囲は3者3様である。西田が主に書字方向についての研究をそう呼んでいるのに対して、犬飼の統字論は文字列の文節、補助記号・句読点、書字方向と読みやすさなどを含むものである。永井は西田の定義に従い、書字方向を中心としながらも、犬飼の述べた字を組み合わせて文字列にするときの規則も含むとしている。

例えば反復符号の出現は、文字をどう形態させるかという字態論で扱われるべきだし、音声言語にない句読点などの補助記号が出現することにより、どう意味に影響を与えるかは、字素論や文字意味論で扱われるべきだと考え、本稿では統字論の対象としない。一方で、それらをどの位置に置くかというのは文章レベルでの配置の問題であるから、統字論の範囲である。したがって統字論の範囲は、永井 (2005) に従う¹⁶。

3.5 その他の基礎分野の検討

これまで書字方向に関しては、「形字論」と「統字論」を検討してきたが、字の二重分節性に従えば、字素の書字方向ともいうべき形字法よりも、さらに下位のレベルとして筆画の方向も研究対象となるのではないか。これは張静賢 (1997: 36) によると、「筆勢」と呼ばれることがあるという。例えば、「左」の1画目は左から右に筆が進むため、元来の右縦書きの統字法とは反対である。垂直方向についてはほとんどが、(筆画の始まりが下部にしかない字を除いて) 上から下という方向であることが想定されるため問題にはならないが、このように水平方向に関しては、統字法と異なった様相を呈すケースが考えられる。さらに張静賢 (1997: 43) によると、筆勢は筆画が出現する順番である「筆序」と合わせて「筆順」と呼ばれる。これ

¹⁶ 音声言語研究における統語論の本質は、順序 (語順などの order) ではなく構造であるとする研究者が多く、現代の主要な統語理論では、順序はそもそも統語論の問題ではなく音韻論の問題であるとさえ言われている。その立場に立てば、文字研究でも音韻論に相当する分野で統字法は扱われるが、文字研究と音声研究は、それぞれの分野を対応させて考えることが難しいことはすでに述べた通りである。つまり、文字 (=語) 同士の順序を制御するレベルのことを扱う研究分野というのがはっきりしないと言えるため、統字論は文字研究に特有の学問分野としてたてられるべきであると考ええる。

も重要な問題である。ただしこれらは字の機能的な問題ではないため、形字法の問題と同じく文字学の範疇で扱われるべき問題であると言える。

音声言語との対応という点で論じれば、語用論の対となる文字研究の分野の存在を考えなければならないが、これはまだはっきりしない。テキストに起こした字列が使われる場面が、字や文レベルでの形式や意味とどう関係してくるのかという問題を対象とする分野の構築は可能であるかもしれない。一見、語用論と研究内容が同じであるように感じられるが、音声言語が使われる用途・場面と、文字が使われる用途・場面は当然異なり、音声言語は直接的伝達で、文字言語は間接的伝達である (河野 1977: 5)。このことからそれぞれに関わる世界、状況は同じではないと言える。ただし、現時点ではこの分野をたてるに十分な研究が進んでいないため、本稿では設定しないこととする。

4 本稿でたてる文字研究の基礎分野

本節では、前節での先行研究の分析の結果として、最終的にたてる文字研究の基礎分野を整理し、述べたいと思う。まず音声学に相当する分野として森岡によって提案された文字論は、3.1 節で述べたように「文字学」とする。続いて音韻論に相当する分野については、字の二重分節性に従い、従来の字素論 (文字素論) を「筆画論 (字画論)」と「字素論」に分けた。福盛・池田 (2002: 47) において、「形声文字は意符と音符という 2 つの字素によって構成される字節とみなすことが可能である」と述べられているように、造字法に関する研究も字素論の範疇である。2 節で取り上げた西田の対照文字学の 2 つ目の例は、まさしく造字法の対照研究で、西田 (1986: 239) では、「表意字形上に現れる意味分析の相違を考える」研究だと述べている。造字法に関する研究は、特に「造字論」と呼ばれるであろう。

形態論に相当する分野として挙げられていたものは、それぞれ何を以て形態素に相当するとみなしているのかが先行研究によって大きく異なった。本稿では森岡の文字形態素論は設定しない一方で、西田のたてた形字論は文字学の下位分野とし、犬飼のたてた字態論を文字研究の基礎分野として設定する。ただ字態論とは、特に文字列の形態と語や形態素、音素との対

応関係に関する研究をする部門とし¹⁷、字態論に含まれていた表記に関する意味を研究する分野は、文字意味論として独立した分野をたてた。文字意味論にはほかにも、文中の句読点や空白の有無、表記上の区切り、フォント、筆記体系、色などの意味の研究が挙げられる。また、字節レベルでも拡張的運用や六書の用字法などは文字意味論で扱われるべきだと考える。最後に統字論は、これまでの先行研究の案をそのまま引き継いだが、その範囲を永井の対象としたものに限定した。

以上をまとめたものを表 3 に示す。本研究は作業過程では音声研究と照らし合わせて述べてきたが、最終的な提案としては、音声研究との対応というのには言及しない。

表 3：本稿でたてる文字研究の基礎分野¹⁸

文字研究の分野	研究内容
文字学	字の形状・形式に関する研究。
筆画論 (字画論)	字の最小単位 (筆画) の機能に関する研究。
字素論	字の基本的構成要素 (字素) の機能に関する研究。
字態論	文字の形態の規則に関する研究。
文字意味論	文字体系や文字記号が与える意味に関する研究。
統字論	文字列の書字方向や文章レベルの配置の規則に関する研究。

¹⁷3.3.2 節の「みすみす」の例は字態論に含まれる。先行研究では、これは形字論の範疇であったが、そうすると漢字の場合、字素レベルと字節レベルの形字法が存在することになる。字素の形字法はいわゆる部首の配置と考えてよいが、例えば日本語漢字文字体系において、「度々」などのように、同じ字の繰り返しは「々」で表されることがあるが、一方で「々度」といった表現は不可能である。これは字節レベルでの形字法であり、さらに対照研究という観点では、中国語漢字文字体系ではそのような規則はないといったことも言えるであろう。これを配置の問題ではなく、文字の形態の問題とみなすことにより、混乱が少なくなると考え、字態論の範囲に含む。

¹⁸これらの中で「筆画論 (字画論)」「字素論」「字態論」「文字意味論」は、字もしくは文字の言語機能について研究する分野であるため、亀井他 (1996: 1346-1347) や福盛・池田 (2002: 34-35)、黒田 (2021: 12-13) の分類に従えば、まとめて「文字論」と呼ぶことも可能である。

これらは、どの研究がその分野の作業となるか明確に分かれているわけではない。例えば、句読点はそれ自体では字素であるから、字素論で扱われる可能性もあるが、文中の 1 つの要素としてその役割を研究する場合には文字意味論や字態論で扱われるかもしれない。ただ音声研究でも、語レベルでの意味論について形態論の領域で扱われることがあるため、文字言語の研究でも、そのようにいくつか分野にまたがる部分が存在することは問題ではないと考える。

最後に、本稿で射程とした文字研究の基礎的な分野を基にして、文字の変化と変異に関する研究や応用分野の研究もたてることが可能である。例えば福盛・池田 (2002: 34) によると、文字の形状・形式を扱う文字学には、筆記用具や文字を記す際の生理文字学などの産出に関わる領域、文字が書かれる媒体などの伝播に関わる領域、知覚・認知に関わる領域も設定可能で、西田 (1981) でたてられた対照文字学や比較文字学への応用となると述べられている。本稿は文字研究の基礎分野の構築を目指したものであるため、これらは射程外ではあるが、今後大いに検討していくべき課題であると言える。

5 結語

本稿では、文字の研究の基礎分野の構築を目指して、主に音声言語との比較から、諸分野について検討してきた。結果として、音声言語と文字言語の間には、それぞれが担っている要素に大きな違いが見られ、音声言語研究のいずれに相当する分野かという視点で構築することは難しいと論じた。そのため、各分野は文字研究に特有のものとして捉えるべきだと考える。ただこれは、これまで研究対象となっていなかった文字研究の諸分野への初歩的な提案であり、音声研究との対応をより意識した分類や、異なる視点からの分類の仕方も考えられる。例えば書字方向に関しては、対象となるレベルに関係なくまとめて「方字論」などと呼ぶこともできるだろう。

一方でまだ検討の余地があるものの、本研究を基にして、各分野での研究が進展する可能性も大いにあると考えている。今後は実際にどのような研究が各分野で行われるのかを、実例を通して見ていく必要もあるだろう。これらは今後の研究にゆだねるとしたい。

【参考文献】

- 犬飼隆 (2002)『シリーズ〈日本語探求法〉5 文字・表記探求法』朝倉書店。
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996)『言語学大辞典第 6 巻術語編』三省堂。
- 神田和幸 (1994)『手話学講義』福村出版。
- 木村規高・原将吾・池田潤 (2022)「文字成立の分類に関する試論」『一般言語学論叢』第 25 号: 1-73。
- 木村規高 (2023)「日本語を表記する体系から考える文字学の術語と文字の構成要素について—文字・文字体系・表記体系の違いを中心に—」『言語学論叢オンライン版』第 16 号 (通号 42 号): 16-30。
- 黒田一平 (2021)『文字と言語の創造性—六書からネットスラングまで』京都大学学術出版会。
- 河野六郎 (1977)「文字の本質」『岩波講座日本語 8 文字』岩波書店, 1-22。
- 河野六郎・千野栄一・西田龍雄 (編) (2001)『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』三省堂。
- 永井正勝 (2005)「古代エジプト聖刻文字の書字方向：一般統字論構築の一助として」『一般言語学論叢』第 8 号: 21-45。
- 西田龍雄 (1981)「世界の文字」西田龍雄 (編)『世界の文字』大修館書店, 5-41。
- 西田龍雄 (1986)「言葉と文字—文字学—」西田龍雄 (編)『言語学を学ぶ人のために』世界思想社, 220-254。
- 福盛貴弘・池田潤 (2002)「文字の分類案—一般文字学の構築を目指して—」『一般言語学論叢』第 4/5 号: 32-58。
- 宮島達夫 (1981)「「文字形態素論」批判」『教育国語』第 66 号: 21-35。
- 森岡健二 (1968)「文字形態素論」『国語と国文学』第 45 巻 2 号: 8-27。
- 張静賢; 松岡榮志 (訳) (1997)『現代中国語漢字講義』三省堂。

- Coulmas, F. (2003) *Writing Systems: An Introduction to Their Linguistic Analysis*.
Cambridge: Cambridge University Press.
- Liberman, I. Y., Liberman, A. M., Mattingly, I. G., and Shankweiler, D. L (1979)
‘Orthography and the beginning reader’. *Haskins Laboratories Status report on speech research*, 57: 67-84.

Defining Foundational Subdisciplines in Grammatology

Noritaka KIMURA

This paper seeks to establish a cohesive framework for the foundational subdisciplines within the field of grammatology. While previous research has proposed some initial subdisciplines, there exists considerable variation in their names and definitions among scholars. An examination of prior literature reveals that these discrepancies arise from differing viewpoints regarding the fundamental unit of character analysis: some scholars consider a single character as the basic unit, while others designate a single word as such.

In light of this divergence, the former perspective necessitates the development of a dual articulation system for characters, ultimately leading to the classification of "graphemes" (字素) and "strokes" (筆画). A "grapheme" is defined as a discrete unit with inherent meaning or sound, while a "stroke" represents the smallest unit of writing. The domains dedicated to the study of these units are named "graphemics" (字素論) and "strokology" (筆画論), respectively.

Conversely, the latter perspective, which treats a single word as the fundamental unit, introduces "graphology" (字態論) and "character-semantics" (文字意味論) as the fields wherein we explore the written form of a word.

Furthermore, the examination of writing direction is labeled as "grapho-syntax" (統字論), while the investigation of the characters' shapes is labeled as "graphology" (文字学).

This paper endeavors to provide a more unified and coherent framework for grammatology, addressing the divergent approaches to its foundational subdisci-

plines, thus contributing to a clearer understanding of this field's research and terminology.

Doctoral Program in Humanities and Social Sciences

University of Tsukuba

1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8571, Japan

E-mail: kimura.noritaka298@gmail.com